

平成24年度

事業報告書

社会福祉法人 青少年福祉センター

法人本部

児童養護施設

暁星学園

児童養護施設

あけの星学園

児童自立生活援助事業

新宿寮

児童自立生活援助事業

清周寮

児童自立生活援助事業

おうぎ寮

共同生活援助事業

ノエル

法人本部

1. 事業の安定的運営サポート

- ①新任職員、2年目・3年目職員、一般職員、上級・指導職員と職位別に法人全体の処遇職員を対象に研修を行った。又、全職員を対象に宿泊研修を行い、法人理念の共有を図った。
- ②求職者との面談を行い、各事業所のニーズに合わせて配置した。内定者には、アルバイト契約を結び、全事業所の見学及び研修を行った上で宿直業務等も行い、法人全体の業務体験を行なった上で新年度に非常勤職員雇用契約を結んだ。
- ③新宿寮移転に伴い法人審査会用の書類等を作成し、東京都と折衝を重ね、25・26年度の2年に跨る建替え事業として、25年6月には内示が出る予定となった。
- ④資料室の書籍等を整理し、扇バザーでも使用可能とするのにとどまった。
- ⑤ほきま地区の建替え計画に当たり、基本設計を清周寮、暁星学園と共に設計事務所と話し合いを行った。
- ⑥煩雑な事務手続きの解消と事務処理のスピード化を図る為に、入・退職時の必要書類及び住所等の変更届に関わる書類を整備し、各事業所に配布した。

2. 会計業務の遂行

- ①外部研修を受け、新会計基準移行への準備をした。
- ②自立援助ホームやノエルの会計業務を支援し、定期的に各会計担当者と研修を行った。

3. 各種行事のサポート

- ①聖心バザー開催に向けてチームを結成し、各事業所・ボランティアと連携して、成功裏に終わらせた。
- ②宿泊研修をおうぎ寮と連携して開催した。

4. 広報活動の継続

- ①センターの活動を広く社会に理解して頂くために、ラジオや雑誌等の取材を積極的に受けた。聖心バザーに於いても、センターの歴史を掲示して、新規後援者の獲得に努めた。既存後援者へのセンター通信送付、ホームページでの情報提供等、広報活動を積極的に行った。又、ホームページを刷新し、今後の経費削減に寄与した。

5. 寄付物品の配布

- ①運営費削減等の一環として、寄付物品を場合によっては受け取りに出向き、事業所に配布を行い、扇倉庫を有効活用した。

6. 新宿寮跡地利用事業

- ①跡地利用計画を立案するには至らなかった。

7. 中長期目標

- ①中期目標：保木間地区の建て替え計画で、基本設計まで終了した。
- ②長期目標：訓練学校跡地利用計画を事業所長会にて、話し合いを始めた。

児童養護施設 暁星学園

1. 運営

- ①本園は、おうぎ寮との更なる連携を図るため、情報共有や業務支援の具体的な方法を検討することを目的として代表者会議や防災担当職員による会議を行い、扇地区・梅田地区の防災マニュアルを完成させた。
- ②ほきまホームは、清周寮、ノエルとの連携を継続し、お互いの職員の精神的ストレスの軽減及び安心感の構築を図った。更に、定期的に清周寮の引継ぎ及び会議に参加し、相互理解を深めるために職員の交換研修を実施した。また、ホーム建替えについての検討が開始された。
- ③うめだホームは、本園との連携を強化するとともに、統括ホーム長を配置し、ほきまホームとの情報共有・連携体制を強化した。懸案事項解消のため、移転を考えているが、適当な物件は見つからなかった。

2. 管理

- ①人財育成担当を配置し、職員育成・指導方針・方法を一本化した。また、職員育成のマニュアル（チェックリスト）を活用し、実用化を図った。育成方法はOJTを基軸とし、全職員が理解し実践できるような基盤作りを心掛けた。
- ②組織の見直しを行い、業務省力化・効率化・情報集約を図るため、生活向上委員会を立ち上げたが、各委員会の報告会にとどまった。
- ③小規模化を推進するにあたり、処遇の標準化や緊急時の対応を整備するための、マニュアル作成委員会を立ち上げ、早急に必要な部分から着手した。
- ④各会議の位置付け、権限、内容を明確にし、組織の再構築を図ったが、一部の職員に業務が集中し、十分に機能したとはいえなかった。

3. 利用者支援

- ①進路選択時に進学も選択できるように、奨学金等の助成団体の把握・整理をした。
- ②自立訓練強化(一人暮らし体験)のため、女兒がパスカを活用した。
- ③性教育委員会により「カラダ新聞」を発行し、男子園生にも性教育を実施した。
- ④台東少年センター等、警察機関との行事を通し、身近に起こり得る犯罪への危機意識を持てるような指導を受けた。
- ⑤アフターケア規程に基づき、就労支援・生活支援を積極的に行った。

4. 中・長期目標

- ①中期目標：専門機能強化型施設への転換に向けて小児精神科医（非常勤）のと雇用契約を締結した。また、治療指導員の雇用も確定したので、平成25年度開所に向けて申請書を提出した。
- ②長期目標：訓練学校跡地利用計画を事業所長会にて、話し合いを始めた。

児童養護施設 あけの星学園

1. 運営

- ①災害発生時を想定した緊急時の協力体制確立のため、新宿寮と協議を行い災害時における組織体制や備蓄品の状況等を相互で確認した。今後は災害時行動指針の作成や合同防災訓練の実施など更なる連携強化を目指す。
- ②専門機能強化型児童養護施設実施に向けて、それぞれのフロアで生活を完結できるよう調理職員を含めた職員配置や備品等のユニット化を進めた。また、他施設見学や外部研修に参加し、職員の資質向上と組織力の強化をはかった。
- ③運営会議を中心とした施設運営を継続したが、運営会議構成職員をはじめとした大量離職があり多くの課題が残った。

2. 管理

- ①災害時に備えて防災用品を購入し、充実させた。また、新宿消防署からの助言を得て、通報、消火、避難誘導等に関する訓練を実施することができた。
- ②研修計画に基づき、各職員が法人内研修や外部研修に参加した。また、職員への希望調査により精神科医師を外部講師とするなど、園内研修を充実させた。
その他、QCサークル活動を実施し小グループでの話し合いを持つことで、施設運営上の課題を共有し、職員間の連携強化を行った。
- ③ 町会総会、運動会、交通安全運動、夜警など、町会活動へ積極的に参加してきたことで認知が高まり、エコキャップの回収拠点となるなど社会貢献を行った。
その他、新宿区社会福祉協議会と連携し、学習指導、調理、掃除、自立支援などのボランティアを依頼することができた。

3. 利用者支援

- ① 月1回の専門職会議を継続して実施することで、児童精神科医や心理職員から多角的な意見をj得て支援方針の修正を行う体制を確立することができた。また、それぞれのフロアで調理を行うことで、家庭的な雰囲気が高めることができた。
- ② 自活訓練棟を積極的に活用することでケースの蓄積を行い、自立支援の強化を行った。
- ③ 退所児童の一覧を作成することで、それぞれの児童の状況を把握することができた。また、年間のアフターケア計画に基づいた支援を行い、学園のクリスマス行事に退所児童を招待することができた。
- ④ 人権擁護委員会を設置し、園内研修において児童憲章の読み合わせや子どもの権利ノートについて学習した。在籍期間が長い児童が増えて苦情解決システムは浸透したが、意見箱への投書は2件にとどまった。

4. 中長期目標

- ① 中期目標：施設整備積立金の積立を行い、グループホームの開設準備を行った。
- ② 長期目標：児童20名の在籍を維持し、こでまりホームとの連携を強化した。

自立援助ホーム 新宿寮

1. 運営

- ①新宿寮移転にともない、法人本部や各事業所との調整を行った。児童相談所や家庭裁判所など関係機関へ移転を通達し、利用者の負担軽減とスムーズな移転に努めた。また、地域交流の一環として、防災活動、催事、運動会への参加など多岐に渡った。
- ②福祉サービス第三者評価の試行調査を導入し、事業改善及び利用者支援の更なる充実を図った。
- ③関係機関との連携を強化し、運営努力を図った。しかし、在籍率約6割と目標値には至らなかったため、来年度も平均12名維持を目標とし、措置費収入の安定を目指したい。
- ④インフルエンザ感染の児童の病室として6名が利用した。今年度は、ステップルームの本来的な主旨としての対象者はいなかったが、来年度は2名が利用見込みである。
- ⑤OBのきめ細やかな対応が行えた。具体的には、大学進学支援、求職支援、居宅訪問、金銭指導、職場訪問、関係者調整、関係者訪問など各児童の必要性、ニーズに応じて最大限の支援が出来た。

2. 管理

- ①あけの星学園との連携をより強化するために、防災会議の実施、相互連携体制の確認を行った。また、毎月1回防災訓練の実施、寮生ミーティングでの危機管理指導を図り、利用者の意識向上に努めた。その他、防災研修に臨み、より実践的な防災訓練の在り方について学んだ。
- ②□寮内職員勉強会では、金銭管理講習、インターネット講習、食育講習を行った。
 - 法人内研修では、新任職員研修、初級職員研修、一般職員研修、上級・指導職研修、宿泊研修に参加した。
 - 外部研修では、ホーム長研修会、自立援助ホーム分科会研修、中核職員研修に参加した。
 - 勉強会の開催、各種研修参加により職員の資質向上に繋がった。
- ③各所点検や補強箇所の修繕を行い、当事業所の環境を整備した。また、洗濯機やパソコンの寄附を頂き、児童の環境整備においても大きな前進があった。
- ④現存するOBファイルを全て整理し、支援実績データを収集した。また、アフターケア支援記録及び実施状況記録を入力し、OBデータ集約を行った。
- ⑤職位職責表は年度末の振り返りだけでなく、年度半ばでも確認を行い、職務向上を図った。また、職員異動にともない、早期に引き継ぎを行うことで、円滑な業務の引き継ぎがなされた。

3. 利用者支援

- ①震災時に備え、防災用具の点検、確保及び毎月1回の避難訓練を行い、意識向上を図った。また、利用者の勉強会として、金銭管理講習、インターネット講習、食育講習を行い、更なる自立強化を図った。
- ②自動車免許資格の取得者が1名だった。しかし、高校通学者が1名、高校通学希望者が1名、訓練校通学者が2名おり、資格取得に向けた取り組みは推進できた。

③今年度はステップアップルームの利用対象者はいなかったが、生活力向上が目的であり、来年度は

2名が利用見込みである。

④年間2回の寮長面談を行った。目標に向け内容を細分化し、自己評価、目標の再確認を行い、より良い自立に結びつけた。

⑤求職者と共にハローワークへ同行し、必ず対面での話し合い時間を設ける事で連携を図った。(同行支援延べ19回/年) また、利用者の働く職場へ定期的に訪問し、作業内容の達成度確認、課題点の整理、新宿寮との関係性構築を図り、より充実した支援を行った。(職場訪問回数延べ20回/年)

4. 中長期目標

①中期目標：在寮生・新規入所者・福祉司などへ移転に関する説明及び周知を図った。

②長期目標：1年半後の足立区移転に向けた取組を昨年度に引き続き行った。

自立援助ホーム 清周寮

1. 運営

- ①第2清周寮の建替えに向けて法人本部と連携を取り、建替えプロジェクトを発足。法人本部、設計事務所、ほきまホームと連携を取り第2清周寮の基礎的な設計を考案する事ができた。
- ②フロア担当制を強化し、関係機関との連携を重視し、前年度より入所率を充実させ、暫定定員を1名増やす事が出来た。しかし、25年度も暫定定員を引かれている状況でもあるので、継続して入所率の安定を図りたい。
- ③ほきまホーム、ノエルとの連携を強化する為に竹ノ塚地区運営会議を毎月2度実施。竹ノ塚地区での利用者の情報を共有することが出来た。また、ほきまホームとは週3度の引継ぎと交換研修を実施し、1人につき3回の宿直を体験する事で双方の児童の事をより理解し、利用者に対する支援を保木間地区で共有し、緊急時の対応など協力してする事が出来た。
- ④事務所、旧長谷場先生の部屋、倉庫などを整備し、建替えに向けて書類の整理などに努めた。しかし、まだ途中の段階のため継続して実施する必要がある。

2. 管理

- ①支援向上を図る為に個人の研修計画を立て外部研修、法人内研修への積極的な派遣を実施する事が出来た。また、ほきまホームとの交換研修を実施し、児童養護部門との違いを把握しつつ、職員との情報交換の場を多く持つ事で職員のメンタルヘルスケアの場所として利用する事ができた。
- ②業務分担を整理し、担当業務をより理解し運営・管理に各々で努めることが出来た。
- ③職位職責表を活用した面談を実施し、各個人の能力を分析し、日々の業務へ繋げることが出来た。またヒヤリ・ハットを活用しマニュアルを作成する事が出来た。しかし途中段階なので継続して実施する事が必要とされる。

3. 利用者支援

- ①毎月の短期自立支援計画を作成し利用者の特徴・支援方法を職員で統一・把握する事で安定して利用者に関わる事が出来た。また竹ノ塚警察署・台東少年センターと連携を更に強化する為、年2度の合同行事の実施・警察主催の行事へボランティア参加・警察主体の利用者への勉強会を開く事ができた。その結果、地域支援が行えるようになり利用者の緊急時に即対応可能な関係性を築く事が出来た。また、安定した就労支援が出来るように職場との連携を強化した結果、1年以上勤務継続をし、安定した就労支援が出来た。高校生については、ハローワークと連携し正社員への就労支援を実施。25年度より5名の正社員雇用者を出すことが出来た。
- ②自立後の生活の安定性の強化を図る為に資格取得を促進した結果、高卒認定資格取得者及び高卒認定資格希望者が出た。また利用者の半数以上が高校・もしくは専門学校へ通学しながら就労と両立できるよう支援する事が出来た。

4. 中・長期計画について

- ①中期目標：建替えに向けて法人と連携をとりプロジェクトを発足。基本設計を作成する事が出来た。
- ②長期目標：充足率を昨年度より伸ばし、安定した運営をする事が出来た。

自立援助ホーム おうぎ寮

1. 運営

- ①グループホームの意義と役割を理解するために、年度末には児童部会のグループホーム制度委員会に参加した。来年度も引き続きグループホームとしての機能を効果的にするために委員会に参加する。
- ②利用者は月平均5.9名となり、安定した入所率を確保できた。
- ③利用者が安全で快適な生活を送れるように、助成金や寄付物品を利用し、排水管工事や、食器棚や食堂の椅子の変更を行った。
- ④法人本部と合同で法人の基本理念「長谷場イズム」をテーマに法人内宿泊研修の企画運営を行った。
- ⑤施設間の連携を強化するために暁星学園と代表者会議を毎月開催し、防犯防災対策の強化、利用者支援の情報共有に努めた。また、防災会議を行い、扇地区（本部、暁星学園）と協同し防災マニュアルを作成した。

2. 管理

- ①法人内外の研修に職員全員が平均的に参加し、勉強会などをして研修内容を共有した。
- ②職位職責表を基に職員の自己評価や振り返りが出来た。業務計画については、業務計画書どおり出来なかったものもあり、業務が滞ることもあった。
- ③事務所の書棚の整備を行った。業務効率化のために文書などの整理を引き続き行っていく。
- ④防災・防犯については扇地区として一体となって取り組む事が出来た。衛生、健康については職員が保健センターの栄養士の栄養指導を受け、寮生に対して学習会を行った。

3. 利用者支援

- ①「愚痴れる、失敗できる、くつろげる おうぎ寮」を利用者支援のスローガンに掲げた。目標達成に向けた個別的な支援策については、処遇会議にて検討したが、寮全体の雰囲気作りについては具体的な計画に欠けていたため今後の課題となった。
- ②毎月処遇会議で個別支援計画を作成したが、利用者本人と面談して作成するまでには到らなかった。
- ③寮生ミーティングを毎月開催し、利用者の自立に役立つ情報提供や、外部から講師の方を招いた勉強会を実施した。
- ④職員が受けた栄養指導を、寮生ミーティングで利用者に伝えた。自立後の食生活に役立つように料理指導を行う計画を立てたが、出来なかった。
- ⑤誕生会や、季節ごとの行事を行ったが、利用者の勤務の予定がばらばらであり全員での行事は難しかった。
- ⑥アフターケアでは初めて寮祭を開催した。卒寮生を招待し、新旧職員との交流を図った。また、卒寮生を新年会に招いたり、誕生日カードを送るなどして、退所後も繋がりを持てるよう努力してきた。成人式の出席率が良かった。

4. 中長期目標

- ①中期目標：自立間際の利用者に、自立に近い形でシュミレーションをして自立訓練をした。
- ②長期目標：昨年度よりは扇地区の連携強化が出来た。

共同生活援助 ノエル

1、運営

- ① 職員1名が体調不良で退職をし、職員を募集しているが、定着には至っておらず、職員1名は他事業所との兼務状態となった。事務処理等は本部職員に業務を委託した。
- ② 保木間地区運営会議に参加し、利用者の情報を知らせ、夜間等のバックアップ体制を確保した。
- ③ 職員体制が万全ではなかった為に、広報をするには至らなかった。

2、管理

- ① サービス管理責任者講習、世話人の講習に参加した。

3、利用者支援

- ① ハローワーク、あしすと(就労移行支援事業所就労準備センター)、わだち(足立区障がい福祉センター)、福祉事務所等と連携を取り就労支援を行った。
- ② 利用者1名に清周寮近くのアパートを一緒に探し、初めての1人暮らしを支援した。その後も、連絡をお互いに取りつつ折に触れて支援を行っている。

4、中、長期的目標

中期目標：職員1名が体調不良により、年度半ばに退職したため、定員を満たすには至らなかった。

長期目標：上記等の理由により法人外での地位の確立には、到らなかったため、今後も計画遂行のために事業所内で話し合いを進めていきたい。